優秀賞

EDOのECO～徳川家康からの挑戦状～

常総市立石下中学校　三年
髙橋　章一郎

去年の冬、僕は家族と日本橋神田川をまわる歴史クルーズに参加しました。日本橋から出航する観光船がときわ橋の下をくぐり抜けるとき、案内の女性が言いました。

「あの石垣に注目してください。」

視線を向けると、驚いたことに、そこには江戸時代の大名である前田家と島津家の家紋が刻まれていたのです。そこはかつて江戸城の石垣だった場所ですが、地上にいたら決して目にすることのないようなところに、江戸時代の職人たちの仕事が、大声で主張するわけでもなく、でも力強く現代人の生活を支えているのです。

考えてみると、江戸時代から、現代の僕達が学ばなければならないことは数多くあります。例えば、その中の一つに、資源の自給自足があります。経済産業省の資源エネルギー庁から出されている「日本のエネルギー～エネルギーの今を知る20の質問」の中で、日本は二〇一六年現在で、資源・エネルギーの自給率が、わずか8．3％しかないということが発表されています。さらに、石油・石炭・天然ガスのような化石燃料への依存度が高く、エネルギーの89％を海外から輸入した化石燃料で賄っていたことがわかっています。しかし、江戸時代当時、鎖国していた日本では、当然のことですが、資源やエネルギーを全て国内で賄わなければならず、実際そうしていました。今の日本の課題とも言える持続可能な循環型社会を当時すでに確立していたのです。なぜそれができたのでしょうか。その理由の一つと言えるのは、「もったいない」の精神です。江戸の人達は徹底したリユース、リサイクルの精神が根付いて

おり、壊れた道具は修理してまた使うこと、ゴミは回収してまた利用することが当たり前でした。代表的なのは着物です。江戸時代、着物は非常に貴重で、庶民にとって古着は重要なものでした。また、さらに古くなった着物は仕立て直し子供用にし、それが使えなくなるとオシメや雑巾にし、それも使えなくなると燃やして灰にし、その灰を売りました。灰はアルカリ性なので、肥料や着物の色抜き、洗剤として利用されたそうです。

とはいえ、求められているのは、江戸時代の生活に戻ることではありません。重要なのは、限られた資源の中で持続可能な循環型社会を作り上げた実績を、今どのように生かせるかということだと思います。そこで僕が提案するのは「エコロピック」という運動を東京オリンピックの正式種目にすることです。これは地球環境を守るために行っている取り組みを世界中に紹介し、評価してもらうという試みです。これを行うことのメリットは三つあります。一つ目は一人一人の意識の中にポジティブでアクティブな印象を持たせつつ浸透させることができる点です。二つ目は、オリンピックと関連付けることによって、四年に一度評価し、新たな課題をあぶり出せる仕組みを構築することができる点です。そして三つ目はグリーンメダルという賞を授与し、地球代表として地球のために戦った証を称えることができる点です。世界にはすでにメダル候補がたくさんいるはずです。石油の代わりに石灰石を用いてプラスチックを組成することで、水溶性のビニール袋を開発することに成功したチリの起業家、スポーツゴミ拾いという競技を発案し、全国各地で主催している日本の団体などがあります。彼らは間違いなく、地球のために戦っている選手だと言えるのではないでしょうか。

日本橋神田川で見つけた石垣の家紋、僕はそれを見たとき、この家紋が刻まれているのは単なる石垣ではなく、歴史そのものではないかと思いました。そしてそれは、何もない田舎を日本随一の大都市へと発展させた、徳川家康からの挑戦状のようにも思えたのです。

江戸が終わって約百五十年が過ぎましたが、今から百五十年後の地球はどうなっているのでしょうか。それは分かりません。いえ、分からないのではなく、まだ決まっていません。その歴史に何が刻まれるのかは、僕達のこれからにかかっていると思います。僕は徳川家康に、そして未来の子供達に約束したいと思います。江戸に負けない文化を築くこと、そして地球を守ることを。それは、これからの地球を委ねられた僕達の責任だからです。